

# ギャラリーT+ の変遷

T+は**2001**年に「芸専ギャラリー」としてオープン、多くの芸専生の創造・発信の場となってきました。

今回は、**2003**年に芸専ギャラリー運営委員となり、その過渡期に立ち会った森未祈さんと、井上美幸さんに当時の活動とギャラリーの歴史について伺います！

## ●運営メンバーになった理由は？

森：最初からギャラリー運営に興味があったわけではなくて。当時のメンバーが和やかで楽しそうだったので入ったって感じでした。チロル（井上さんの愛称）もそう？

井上：私もそんな感じ。それで、歓迎会的な遠足に行った気がする。

森：新入生歓迎会で、車で諸橋近代美術館に連れて行ってもらいました。古いビートルに乗っている先輩がいて。手作りの旅のしおりがすごく素敵だった。そういうのが楽しくて、そのまま始めました。

井上：毎年結構良い遠足したよね。新歓で人を集めてた。

森：都内の大きな美術館はいつでも行けるけど、一人だと行かなそうな福島や千葉みたいな近隣の美術館や街に遊びに行きました。

## ●芸専ギャラリー時代の活動は？

井上：壁を塗ったりしてたね。

森：入ったばかりの**2003**年頃はまだ芸専ギャラリーというものが定着し始めた頃だったので、仕組みを整えたり、掃除をしたり、備品を増やしたりしていました。あと、フリーペーパーを発行してたね。「T+ペーパー」の前身です。

井上：「芸ギャラ新聞」だった気がする。

森：そうだ！毎月発行していました。

## ●芸専ギャラリー設立からT+へ

森：芸専ギャラリーは**2000**年に設立計画ができて、**2001**年**9**月にオープンしました。私たちが入学したのは**2003**年で、その時に芸専ギャラリーの運営委員になって。だからその頃はまだできて日が浅い状態でした。覚えているのは、**1**年生の時に芸専ギャラリーのロゴが私たちの目の前で出来ていくのを見

もり みねく

## 森 未祈さん

横浜美術館 学芸員 / エducator

教育普及グループで活動。さまざまな教育プログラムを企画している。横浜トリエンナーレをさまざまな角度で体験し、表現しようという**10**代向けの連続プログラムや、横浜トリエンナーレのツアーガイド、小中高生のためのリーフレット作成などを担当。

**2003**年 筑波大学芸術専門学群入学 芸ギャラ運営委員に  
構成専攻 総合造形領域へ

**2005**年 T+代表を務める

**2007**年 卒業  
横浜市芸術文化振興財団へ入職し、  
横浜市ギャラリーあざみ野に勤務

**2014**年 横浜市民ギャラリーに勤務

**2018**年 横浜美術館に勤務

いのうえ

## 井上 みゆきさん

アーティスト

行為から発展する芸術表現に着目し、インスタレーション、パフォーマンスを行う。現在はロンドンで子育て中。

**2003**年 筑波大学芸術専門学群入学 芸ギャラ運営委員に  
構成専攻 総合造形領域へ

**2007**年 卒業  
筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻入学

**2011**年 修了

たなということ。だから本当に出来立てホヤホヤで。私たちが**2**年生だった**2004**年に、T+に改名しました。その時の代表は脇坂愛子さんで、私は**2005**年に代表を務めました。

## ●T+に改名した頃のお話

森：「芸専ギャラリー」っていう名前がすごく内向きに感じて。私たちは「芸専」って言っているけど正式名称じゃないし、外の人に「芸専ギャラリー」って言っても伝わらないよねっていう話が出て。それでみんなで話し合って「T+」という名前に改名しました。その後企画展をしたり、Webサイトを新調したり、メールマガジンを始めたり、名前を変えたタイミング以降でどんどん積極的になっていったんですね。何があったか覚えてる？

井上：橋本さんも（ギャラリーの）名前決めるあたりからいたんだっけ？

森：そうだね。担当の先生とは別にアドバイザーとして当時、技官の橋本典之さん(\*1)が入ってくれたのが**2004**年**5**月で。橋本さんのアドバイスもあって名前を変えたんだよね。

井上：それまでは活動部屋もなかったんだよね。橋本さんが作ってくれた。

森：そうだそうだ。それまでは芸バチとかで活動してたね。

井上：芸バチ懐かし〜。

森：予算もなかったんだよね。だから自分たちでお金を出し合っって学園祭で稼いで、そのお金を運営費に充ててた。橋本さんが先生たちから予算を取ってきてくれたりしてたんだよね。

井上：そうでしたそうでした。

## ―手探りの状態からのスタート、という感じだったんですね。

森：そう。それでギャラリーの名前を変えたのも、結構見切り発車で。変えた後に、当時の芸術専門学群長の

西川潔先生から「勝手に変えちゃった…」みたいな感じでちょっと残念がられたんだよね（笑）。意外と西川先生が「芸専ギャラリー」という名前を気に入ってたということが後から分かりました。T+に改名したときの話し合いはチロル覚えてる？

井上：あんまり覚えてないな…たくさん候補を出したとは思ってたけど。

森：うんうん。言葉の響きもすごく大事にしている。誰かの突出した案ではなくて、みんなで話し合っって「記号を入れたいよね。」とか「筑波だからTが〜」とかそういうところから始まったんだけど。みんなで楽しく考えました。

井上：ミーティングはいつも楽しかったです。

森：うん。すごく楽しかったよね。

―過去の記事の中にギャラリートークを実施したという内容があったのですが、その頃はそういった活動はされていたか？

森：「芸ギャラ」時代はそれぞれの学生の主体の展覧会が行われていたので、その展覧会に自分たちが深く関わることはあまりなかったんですけど、「T+」に改名して私が代表をしていた時には、「つくばのマンガ家展」という企画展を主催しました。その時は展覧会に合わせて、斉藤尚武さん(\*2)と高浜真さん(\*3)という二人の漫画家によるトークセッションを「つくばマンガ概論」と称して階段教室で実施したね。あれ面白かったよね。

井上：うん。

森：T+レビューもその後に立ち上げました。毎週学生の展示が変わっていくのでそれをちゃんとアーカイブに残していくためにどうしようと考えて。芸専ギャラリーってファイン系とかデザイン系とか、ある種「作る立場の人」が発表する場だけれども、芸術学とか「書いたり考えたり研究したり」する人たちの発表の場にもなったら良いねということで、芸術学の有志の人にメンバーになってもらって、毎週の展覧会の批評や評論を書いてもらうということをしていました。

## ―その批評はどうやって外部に発表していたのですか？

森：webサイトに記録写真と一緒に載せていました。当時のアニュアルも今手元に残っています。この時書いてくれていた人たちは今、学芸員になっていたり大学の先生になっていたりしますよ。今パッと見ただけで、国立西洋美術館、高知県立美術館で働いている人がいる。

## ●ギャラリー運営を通したご自身の変化について

森：最初にも言ったみたいに、「なんとなく楽しそう」で入ったっていう感じのまま、ただただ楽しくて活動を続けていたというのが正直なところで。支援するぞっていう志はなかったよね？

井上：うん、ないと思う。私、大学に入った時は視覚伝達デザインをやりようと思ってたから、運営を通してデザインの勉強になるなと思ってた気はする。

森：特に印刷物はよく作ってたもんね。私の場合だと、結果的に自分が作る側ではなくて芸術を支える側の方が向いていると感じてきて。今振り返るとすごく今の仕事の原点だなと思います。デザイン専攻の人はみんなで何かを作っていく過程が多いんだけど、構成専攻はそういうのはあまりなくて。上下関係のないフラットな関係の中で、みんなで話し合っっているんなアイデアを出して何かを作っていく面白さ

を味わえたのがT+での活動だったなと思います。井上：あとは運営を通して実務的なギャラリーを整える技術を学んだな。

森：壁を塗ったりね？

井上：直したり。

森：すごい発明を紹介して良いですか？

## ―ぜひ！

森：最初はそうでもなかったんだけど、T+がどんどん人気になって、取り合いになっちゃったんだよね。申し込みのシステム作らなきゃ！ってなって、みんなで知恵を絞って、「Webじゃんけん」っていうのを編み出して。「〇月〇日〜〇月〇日まで使いたいです」っていうのをWebサイトで申し込んで、ジャンケンの手を選ぶの。（あいこになった時に）グーチョキパーから最大7つ選ぶ。たとえば「私はグーの次はチョキ、パー、チョキ、グーを出す！」みたいな。それで、申し込みがAさんとBさんで重なった時は戦わせるの（笑）。超アナログデジタルWebジャンケンをみんなで考えて開発したんだよね。それでチロルが気持ち悪いジャンケンの手のイラストを描いて（笑）。

井上：ふーん??

森：これがね、不思議なことに、あいこになって決まらない時がいつかあるかもしれないと心配したものの、決まらなかったことは一度もないんだよね。必ず決着してた。そんなことを手探りで考えてました。

## ●これからのT+ギャラリーに一言！

井上：え〜〜？未長く??（笑）未長く多様性を持って、ざっくばらんに！

森：私たちも「芸専ギャラリー」から「T+」に突然改名したくらいなので、「この伝統を守ってこう！」なんてことは思わずに、皆さんのびのびと好きなことを自由にやったら良いんじゃないかなあとと思う。

井上：学生の自治的な場所だな、って思う。それはすごいいい。

森：うんうん。そうだね。

(\*1)《Panorama Ball》や《超高解像度人間大昆虫写真[life-size]》などの作品で知られるメディアアーティストで、当時の筑波大学芸術学系の技術職員。オープン当時のT+の活動を支えてくれた。

(\*2)茨城県勝田市（現ひたちなか市）生まれ。筑波大学芸術専門学群視覚伝達デザインコース卒業。多数の賞を受賞している。

(\*3)熊本県天草市出身。筑波大学芸術専門学群総合造形コース卒業。デビュー以来、欧米でいち早く評価を受け、著作の多くがフランス語に翻訳されている。

この度は、お忙しい中貴重なお話をたくさんお聞かせくださいまして本当にありがとうございます！！

今回のインタビューを通して、「T+ペーパー」・新歓・活動部屋・「T+」という名前など、現在のT+を形づくる様々な要素の原点を知ることが出来ました。これからも新しいことにどんどん挑戦しながら、芸専生の創作・発表を支えていきたいと思ひます。